

正寿寺の創立と幕末の事件

深江塾 森 口 健 一

寺と神社

「古い町」にあって「新しい町」にないのが寺と神社である。戦後にできた所謂ニュータウンという所に、お寺や神社がある

ということとは寡聞にして知らない。

季節の移り変わりに応じて神社を中心に祭りという名の神事が行われる。お寺では、人生の終末やその後は縁者を中心に、多くの人がお寺に関わることになる。寺や神社はその地域の人の生活に本来は身近であり欠かせない施設というものである。



写真1 震災以前のありし日の正寿寺（昭和36年）

深江には、寺は浄土真宗本願寺派の正寿寺^{しょうじゅじ}、神社は通称大日神社^{だいにちじんじや}、正式には大日靈女神社^{おおひるめじんじや}がある。立地しているのはいずれも深江本町三丁目である。深江の町は古い歴史のある町なのだ。ともに平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災で全壊し再建された。正寿寺は現在は鉄筋コンクリートのモダンな建物に変わったが、それまでは重厚な歴史の重みを感じさせる本堂だった（写真1）。

人々は、葬儀や法要でこの寺を利用し、季節の移り変わりに応じて神社の行事を担うことにより、時間を共有してきた。この寺と神社が、深江における信仰の場として深江の歴史を刻んできたことに異議を挟む人はあるまい。

しかし永い時間が共有されながら、むしろ永いゆえか、この寺や神社の由来は定かでない。この寺がなぜこの宗派であるのか？ その宗派と深江の人々の関係はどうなっているのか？ いつからこの場所に寺はあるのか？

この「深江物語」も寺と神社を語らずに、物語は成り立たない。それにしても、寺と神社について聞くべき人がいない。文字になった資料（史料）がほとんどない。そのためであろう、寺も神社もその由来歴史には異説がある。

現在一般の人が比較的に見やすいのは『本庄村史』にある記述であろう。この書籍では幾つかの文献を紹介しているが、確定した由来、歴史は結局不明である。村史にも引用されている『武庫郡誌』を紐解いてみた。

『武庫郡誌』の正寿寺の記述

『武庫郡誌』を開く。該当箇所は「第一三節 仏閣 第三項

永井山正寿寺（深江字垣添）」である。以下に、『武庫郡誌』の当該記述を全文引用する。なお旧字は新字に改めた。

【開基其他】真宗西本願寺末京都六条常樂寺末なり。本

尊は阿弥陀如来にして、寛永十癸酉年（紀元二二九三年）僧空照の開基する所、境内三百六十坪、檀徒五百余戸あり。

【沿革】往昔芦屋川西方字池の下に一部落あり。之を永井屋敷と云ひ、其西方四ツ松川附近字藥王寺及び堂の後に一部落あり、之を藥王寺旦家と云へり。其部落に一寺あり藥王寺と称し、真言宗にして大日如来を安置せしが、文明年間（紀元二二九—四六年）本願寺八世蓮如上人布教の際、時の住職觀空之に帰依し、改宗して弟子となり、道場延寿寺と称し阿弥陀如来を本尊とせり。

寛永十年（紀元二二九三年）之を現今の位置に移転せり。時に藥王寺・永井屋敷の両部落は合同して深江村と称したり。

会々永井三左衛門、薙髪して空照と称し、寺を永井山正寿寺道場と改め其住職となれり。之を当寺の開基となす。

同十九年十二月十七日、本山より木仏を下附されし、寺号を許さる。由りて正寿寺と称するに至る。

天保十二年（紀元二五〇一年）本堂の一部消失し、記録悉く烏有に帰す。

故に当記を尻池高福寺より転写し、今に存す。

【宝物】宝物を挙ぐれば左の如し。

一、本尊阿弥陀如来立像

一、親鸞聖人御影 寛永十九年壬午十二月許可
一、蓮如上人御影 文化元甲子年三月三日許可

右の外、種々の御影あり。

以上『武庫郡誌』によれば、室町時代後半に藥王寺という真言宗の寺があった。文明年間（一四六九—一八七）浄土真宗の蓮如に帰依した藥王寺の住職は、改宗とともに寺の名前も延寿寺と変えた。寛永十年（一六三三）、寺を字藥王寺から字垣添へ移し、さらに寛永十九年（一六四二）には京都の本山から正寿寺の寺号を許可されて現在に至ったという。

『武庫郡誌』の読み解き

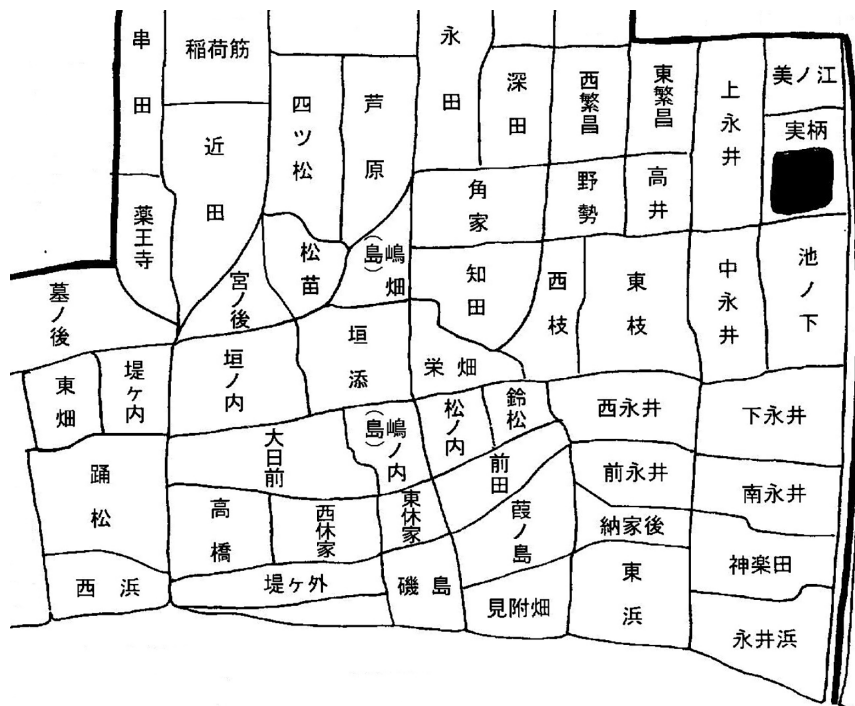
以上の文を筆者なりに読み解いてみたい。

まず所在地の「深江垣添」の垣添とは正寿寺の現在地の旧地名、小字名である。ちなみに大日神社の旧地名字名は垣内である。芦屋川河口近くの西、深江の東端で現在の芦屋との境界近く、阪神電車軌道の北側に宝島池あるいは皿池と呼ばれる溜池がある。溜池南の小字名に「池の下」があった。現在の深江本町一丁目で、昭和四十七年までは繁昌町と呼ばれていた所である。その付近に一つの集落があった。この集落を永井屋敷と言った。現在の深江と芦屋市の境界近く、字池の下を取り巻くように永井の字があった。深江南町一丁目から北に向かって深江本町一丁目、同北町一丁目は永井浜、南永井、下永井、前永井、西永井、中永井、上永井という小字が連なっていた。

その集落の西の方の高橋川の支流の四つ松川付近の字藥王寺と堂の後に一部落があった。小字の「堂の後」というのは明治

時代には「宮の後」とある附近だろう（図1）。これを薬王寺檀家といった。その部落に一つの寺があつて薬王寺と言ひ、寺には大日如来が安置されていた。

ところが、室町時代の文明年間（一四六九—一八七）、本願寺八



深江の小字（『本庄村史』地理編・民俗編所収）

世の蓮如上人が当地布教の時、當時の薬王寺住職であつた観空は蓮如上人に帰依し、真言宗から浄土真宗に改宗して蓮如の弟子となつた。寺の名前を「道場延寿寺」と変えて阿弥陀如を本尊とした。

寛永十年（一六三三）この延寿寺を「垣添」に移した。現在の正寿寺のある場所、深江本町であり昭和二十五年までは大日町であつたところである。寺が薬王寺から現在地に移転したところ、東の永井の集落と西の薬王寺の集落は一つとなつて深江村と称するようになった。

寺を垣添に移転するにあたり、永井三左衛門が剃髪し空昭（空照）と名乗るとともに、寺の名前を「永井山 正寿寺道場」と改めた。この道場は単に「念仏道場」ともいう。

正寿寺	
法教院空昭	基廟
元禄十一年	傳行化五十三
元禄十四年	嗣法化九
享保四年	法脉經傳廿二
元文五年	傳法弘法廿二
宝暦六年	法脉行化十八
安永八年	
寛政九年	相承四年 自念より
弘化三年	本堂建立中興開基
慶應四年	血脈寛政八年 桂職
慶應四年	戒橋并三間昇進
昭和九年	血脈表門建立
昭和九年	余間昇進
昭和九年	法脉傳法
昭和九年	血脈病室 兼傳
昭和九年	再興寺建

写真2 正寿寺の歴代住職忌日



写真3 正寿寺過去帳「蓮華勝會録」
天保12年から始まっている

移転から九年の後、寛永十九年（一六四二）十二月十七日、本山から木仏を受けて正寿寺と名乗ることが正式に認められた。これらを以って「空昭（空照）」を正寿寺の開基とした。

正寿寺には開基の空照を初代とする住職の歴代忌日が保存されている（写真2）。

以上が大正十年（一九二一）発行の『武庫郡誌』の正寿寺に関する記述で、その元になったのは「尻池高福寺より転写」と断っている。その理由は、天保十二年（一八四一）の火災で正寿寺本堂が焼けて記録がことごとく無くなったためであると記している。なお、神戸市長田区尻池には浄土真宗の寺「高福寺」が現存している。

一方『本庄村史』地理編・民俗編によ

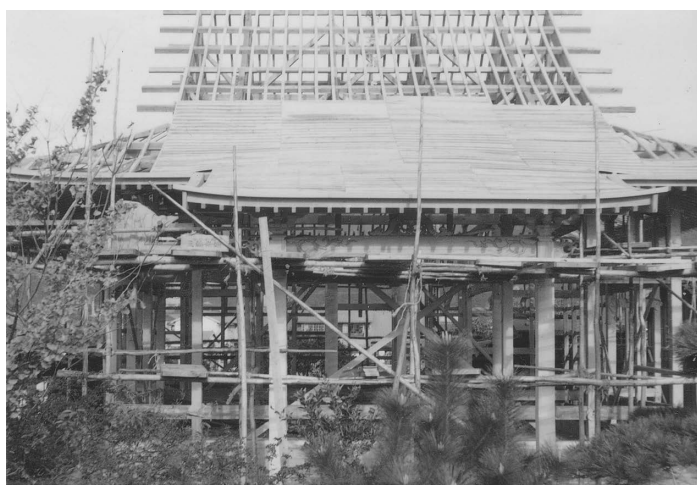


写真4 再建中の正寿寺（昭和36年）正寿寺提供

れば、寺伝では天文年間（一五三二―一五五五）永井氏の出身の僧正福が、本願寺九世実如の裏書のある阿弥陀如来像を安置したともいう。少し内容は食い違っているが、戦国時代に真言宗から浄土真宗に改宗したという点では共通している。

正寿寺に残る最古の過去帳

『武庫郡誌』の記述は「尻池高福寺より転写」と断っているように、正寿寺の一次史料ではない。ただ、転写した理由として「天保十二年の火災で本堂が焼けて記録がなくなった」とい



写真5 屋根がほぼ完成（同）

う信憑性を裏付けるものとして、正寿寺に現存する最古の「過去帳」がある。その過去帳は「天保十二年」から始まっているのである（写真3）。

江戸時代の深江の住民はほぼ全てが浄土真宗の信者であり正寿寺の檀家である。そのため住民の死去に伴う記録は正寿寺の過去帳に全てが記録される。

この過去帳の中身は個人情報ということで記載されている親族以外は見る事はできない。『武庫郡誌』の記載の天保十二年の火災によって本堂が焼けて記録が失われたという記述と、現存する最古の過去帳の年が符合する。

記録の消失という意味では、この天保十二年（一八四一）のおよそ一〇〇年後の昭和二十年（一九四五）の空襲のため多くの史料が失われたが、過去帳だけは持ち出されて今に伝わる。本堂も焼失したが昭和三十六年に再建された（写真4、5）。

木造で所謂宮大工による建築であった。詳細は不明であるが本堂は江戸時代から伝わる建築様式を踏襲したといわれている。当時総工費が五〇〇万円といわれた。令和の現在価値ではおよそ一億円にもなるだろうか。

新しい発見：神戸事件の舞台

江戸時代の天保十二年の火災以後新たに作成され、昭和二十年の空襲によって焼失した記録の中に含まれていたかもしれない大事件が、最近になって分かった。

発端は、平成三十一年、岡山県の郷土歴史研究家の衛藤廣隆氏が、神戸事件の文献調査中に「深江村の正寿寺」という名が出てきたということで、寺に来訪されたことに始まる。

神戸事件は最近では学校の教科書にも掲載されることなく「知る人ぞ知る」だけの出来事になってしまっている。しかし、明治新政府が正式に外国と行った最初の外交交渉で、日本の近代外交史、政治史にとって、重要な出来事である。

事件は、神戸の港に停泊する米英など西欧人と岡山方面から進軍してきた岡山池田藩兵とが、神戸元町の三宮神社付近で衝突したことに始まる。進軍する池田藩の隊列を西欧人が横切ったことに対し、池田藩のその場の責任者が手槍で持って西欧人を威嚇したこと、双方の発砲事件になった。慶応四年（一八六八、九月に明治に改元）一月のことである。事件発生とともに武力に優れる西欧列強の軍隊によって、神戸の町は封鎖占領される事態となった。

明治新政府と西欧諸国との様々な外交交渉の結果、「一人の武士の切腹によって、その命と引き換えに西欧列強との戦争や神戸の町を外国に占領されることを避けられた」のである。そのサムライ・武士の名を瀧善三郎という。

岡山の歴史研究家衛藤氏から教授いただいた文献に沿って深江に関係のある出来事を追ってみる。

事件当時、池田藩は西宮の警備を命じられており、打出に陣屋があった。池田藩の責任者の一人である瀧善三郎たちは摩耶山、六甲山山麓を東に進み森村（現東灘区森北町）や深江村の寺を中心に分宿していた。瀧善三郎の宿は森村の志井六兵衛の家だったという（岡久渭城『明治維新神戸事件』瀧正信顕彰會、一九三八年）。

神戸の居留地付近での発砲事件に伴い、西欧列強は新政府に

対し「下手人を犯罪者として死罪」を要求してきたのである。事件当時の岡山池田藩の進軍は正規軍の行進であり、その進行を妨害した西欧人は無礼な行動である。

明治政府は、諸外国に対し正当な政府であり外交権とその交渉力を示すため、結果として外国の要求を呑むことにした。即ち、瀧善三郎の切腹である。森村に駐屯していた瀧善三郎は、警護の者たちに付き添われ、深江村の正寿寺に下った。正寿寺のすぐ南には西国浜街道があり、刑場即ち切腹場所である兵庫津の永福寺に繋がっている。

神戸事件と瀧善三郎の武士としての行動や切腹の作法については、かの新渡戸稲造の有名な著作「武士道」にも紹介されている。瀧善三郎は、その「武士道」にも書かれているほどに立派な人物であつたらしい。文武両道に秀でたサムライであった。彼は死出の道を森村から深江村の正寿寺に向かう。

六甲山の麓、森に囲まれた森村の寺から海岸に近く西国浜街道に近い深江村の正寿寺を経て、瀧善三郎は罪人として切腹場所である兵庫の寺へ向かった。その胸中を瀧善三郎は歌に託す。

いまははや 森の日陰と なりぬれど

朝日に匂う やまと魂

「森の日陰」の森は森村を示している事は容易に分かる。

「(わが身は死んで) 森村の山手の木々の木陰に隠れてしまうけれど、朝日に輝くのは武士の心、大和魂である(それは永遠である)」という意味であらう。

きのう見し 夢は今更ひきかえて

神戸の浦に 名をや残さん

「(昨日まで) 見た(将来の) 夢は、今更どうにもならないけれど、この神戸の海辺に(武士の名譽の) 名こそ残したいものである」と解釈できるであらう。

神戸事件は、神戸の歴史を語る中では欠かせない事件である。あるいは日本外交史を学ぼうと思う人においては、その知識は必須の事柄であらう。そのような歴史的事件の顛末の中で、深江の正寿寺が舞台として出てくることは驚きであり、多少の誇りの気持ちも隠せない気分になる。

これまでの深江の歴史の事跡の中から、『本庄村史』でも触れられていない話である。この神戸事件と深江村や正寿寺のかかわりについては、深江の歴史として新しく記憶されるべきページが加えられたと思う。

協力のお礼

この原稿作成に当たっては正寿寺の棘信勝住職から資料の提供など、多くの協力を頂きました。また、岡山の郷土史家衛藤氏からは平成三十一年の正寿寺における講演会をはじめ、氏の話を参考にさせていただきました。なお、深江塾は令和二年度例会はコロナウイルス禍のため不開催でした。森口が原稿を書き、大国が修正しました。